史学科二十年の歩み

昭和三十八年四月に新設された別府大学文学部史学科は、昨年四月をもって満二十年目を迎えた。

一口に「二十年目」と云ってしまえば、いとも簡単だが、現実的には、それはじれったい程遅々とした歩みであり、また感傷的には「一炊の夢」にも似た年月の経過でもあった。

ここに、史学科創設二十周年目を迎え、史学研究会機関誌『史学論叢』第十六号を刊行するに当たり、科二十年の歩みから、主要な出来ごとをあらかた拾っておきたい。

史学科が創設される十年前の昭和二十九年十月、別府大学に「附属上代文化博物館」が開設され、故清原貞雄氏が館長、学芸部長に賀川光夫、学芸員に山田泰三、事務に永井幹生の諸氏が任命されたことから、史学科創設の因由が始まった。

この博物館は、市内聖人ヶ浜所在の海浜ホテル水族館の旧施設を借用して開設されたものであり、一階の旧水槽を利用して孝古資料を、二階には、絵画・美術工芸資料が展示され、この施設はその後、市内遊覧バスの「Dコース」として、京都大学附属

の別府地球物理科学博物館とともに、別府市内の名所の一つになっていた。

上代文化博物館を所管する研究室は、当時正式には「上代文化研究所」と呼ばれていたが、その後、学園の経済事情も影響して、はかばかしい運営も行えず、博物館とともに、表面的は「開店休業」的な存在に陥った。

しかし、賀川光夫を主体として、研究活動だけは精力的に続けられ、上代文化研究所の名称は、別府大学考古学研究室、またある時は史学研究室の名称のもとに、昭和三十六年に至った。

昭和三十六年春以来、後藤重巳の手によって、土器類の復元作業が精力的に進められ、その数が約六十点に達した翌年、この博物館の再出発を目指した原始文化展が開催され、世に予想外の反響を呼んだ。この展示会での解説文は、賀川と後藤が担当、当時文学部講師であった今永清二が解説板に浄書するという奇妙な取り合せであった。

こうした気運の中から、文学部に史学科開設の志向が急速にたかまって来た。

戦後の経済的混乱期から脱出し、社会情勢もやや安定し、加えて国際情勢が多様化しはじめた昭和三十年代後半に至ると、「歴史」への関心がたかまりはじめた折でもあり別府大学に、既存の国文・英文学科に加えて、史学科の新設が志向されたのは、極めて

当然の成り行きであった。

三十七年、大学は、文部省に「史学科」の新設を申請、その準備のために、夏から秋にかけて多忙な時期を迎えた。

翌三十八年早々、文部省から、定員二十名の史学科の新設が認可され、賀川光夫、今永清二、前年から初等教育科で社会を担当していた河野房男、宮崎県立博物館から鈴本重治を迎え、これに後藤が加わり、林章、加藤知弘が非常勤という教官陣容であった。

設置の認可と出発が遅れたこともあって、この春、史学科に入学した学生は、わずかに八名（のち一名編入）に過ぎなかった。学生の出身地は、県内五名、熊本、宮崎、鹿児島各一名、うち一名が女子であった。

同年四月末から五月初めの連休を利用して教官・学生全員で、野外研究旅行が企画された。研修地は、大野・竹田地方で三泊四日。大野地方では、大野庄の遺跡を探索、翌日、朝地町に宿泊した折に、著名な大恩寺遺跡・草木遺跡の発見がなされたのであった。

同年六月、速見都山香町所在の川原田遺跡の、そして八月には、朝地町大恩寺・草木両洞穴遺跡の第一次発掘調査が行なわれ、ともに、当時の社会の関心を一手に収めた

感があった。

翌三十九年一月、大分合同新聞社主催の「原始文化―大分のあけぼの展―」が開催され、会場のトキハホールには、開店以来という参観者が集まり盛況を見せた。展示解説は、史学科がすべてを担当した。

同年四月の新入生は十三名に達し、男子、女子半々の比率で、出身地も九州一円にまで及んだ。

同年八月には大恩寺・草木洞穴遺跡の第二次調査が行なわれ、更に多大な成果を世に問うた。

この頃になると、学生の研究志向も多様化し、史学科学生が中心となって「別府大学伝説研究同好会」が結成され、やがてこの同好会は、正式サークルの「歴史研究部」となり、機関誌「海」が「歴史の海」と改名され、急速に発展をとげた。

四十年に入ると、九州大学・広島大学・北海道大学等から、小林・伊藤・矢田氏らを迎えての集中講義体制も整ったが、何をさておいても重要な出来ごとは、史学研究会の結成と機関誌『史学論叢』の発刊であろう。

『史学論叢』の刊行作業は、昭和三十九年夏から始められ、四十年一月に刊行された。本号には賀川光夫の序文と、河野、今永の二論文、三十九年の広島大学伊藤隆夫

教授の講義要旨を掲載し、ここに、史学研究会とその機関誌は、呱々の声を上げたのである。

同年十一月、アメリカ海軍の原子力船エンタープライズが佐世保に入港、これに反対する国民、市民運動の波は、当然、別府大学にも波及し史学科学生もこれに参加、逮捕されるという事件も起り、学生の社会運動への関心も高揚した。

四十年春の新入学生は二十八名に及び、学生定員が三十名に訂正された。この年五月、京都市立美術館で開催された「ミロのビーナス展」には、史学科学生を中心に、二泊三日の研究旅行が企画された。

同年夏、別府大学・東北大学・東京大学・長崎大学の協同による大野郡緒方町大石遺跡の調査が行なわれ、翌四十一年まで続けられたが、その主力は、勿論本学史学科であった。

こうした活動が世に問われるに伴なって、本史学科に対する関心もたかまり、四十一年度入学生は六十五名に達した。

昭和四十一年は、別府大学開学二十周年目に当たる年であったが、戦後開設の地方私立大学は、施設をはじめすべてが劣悪な諸条件下にあった。この状態から脱皮するには勢い、入学定員をオーバーする学生の募集が不可欠であった。

このため、四十一年度の史学科入学生は六十余名となったのであったが、次第に高揚する学生の自治意識と、学生運動では、水増し入学の非が論ぜられる程であった。

次第に激化する全国の学園紛争を鎮静する対策として、政府が四十四年「大学の運営に関する臨時法案」を制定すると、大学紛争は、火に油を注ぐ様相を呈し、別府大学でも、その例にもれなかった。

これより前、四十二年二月、史学科の井脇信子を委員長とする学生自治会執行部が解散、続いて、同じ史学科の久保淳次委員長となり、史学科そのものが紛争の真只中に押し出された。

四十三年、四年とこの紛争が続き、同年九月には、入学金をはじめ納入金値上げの問題に端を発した運動は、ついに前期試験のボイコット、三人の学生によるハンストにまで発展したが、その先導には、常に史学科の学生がいた。

しかし、これらの学生運動にまい進した学生たちの多くは、一つの著しい個性を有していた。それは、彼らが、強力な自治の主張とともに、極めて真剣な勉学者であったことである。

彼らは、研究意欲も旺盛であり、充分の学力を修得し、従って大分県をはじめとする九州各県の教育委員会、市町村教育委員会等に難関を突破して就職したのであった。

昭和五十一年、別府大学は創立三十周年目を迎え、その記念として記念館＝博物館が新築され、同年十月成大な記念式典が挙行された。

この博物館は、史学科を中心とする学芸員養成課程の為の講義や実習に活用されるとともに、史学科の主たる授業もここで行なわれている。

四階の展示室は、史学科考古学研究室が所蔵する考古資料を主体に、課程履修の学生による資料展示実習の場となっており、資料収蔵室に所蔵される旧石器・縄文時代を中心とする考古資料の質と量とは、西日本一を誇る程になった。

三階に設けられている古文書室にも、東九州地区の近世期文書史料が収集・保管され、研究や学生の教育活動に利用されている。

一方、東洋史・西洋史等外国史研究に不可欠な基本史料の収集も積極的に行なわれている。

昭和五十五年春、史学科は文部省から八十名の定員増が認可され、以降、史学科の学生総数は、文学部学生の四割を占める大世帯となった。

昭和五十九年春、第十八期目の学生が卒業したが、その時点で卒業生の総数は約一一〇〇名に達した。

昭和四十年代中葉以降、史学科教官は、次第に隆盛化する県、市町村史誌の編集刊

行事業にことごとく関係し、社会的に大きく貢献し続けて来た。

一方、卒業生も、大分は勿論、福岡・熊本・鹿児島・沖縄をはじめ、九州内の各県、中国地方の諸県および市町村の教育委員会等に就職し、めざましい活躍をしている。

史学科内部の講座も、今日では、日本史・東洋史・西洋史・考古学と四分野に亘って編成され、文献書籍史料も研究上ほぼ不足のない状態にまで充実されて来た。

専任教官九名に加えて、非常勤五名、集中講義四名の陣容は、地方私立大学としては、異聞に価するものであろう。

しかし反面、最近の学生の学習研究意欲は、ややもすると低迷気味であり、問題がないでもない。

四半世紀、半世紀後の史学科の基礎を築くためには、更に真摯な研究と教育指導がなされなければなるまいし、学生自身の確たる研究意欲が期待されるところである。

（文責　後藤）